

# 齊韻字に対する字音注の変遷について

中澤 信幸

## はじめに

漢和辞典の字音欄には、必ずと言っていいほど漢音・呉音の両方が載っている。漢音が「隋・唐代の北方標準音を輸入した音」であるのに対して、呉音は「それ以前に日本に入り込んでいた音」と一般には言われている。また漢籍の読書音は漢音系とされ、仏教経典の読誦音は呉音系とされる。

しかし古文獻の蒐集・整理の進んだ現在では、漢和辞典の漢音・呉音が実際の漢音系資料・呉音系資料の字音を必ずしも反映していないことが明らかになっている。すなわち現代の漢和辞典は近世に盛んに行われた「字音仮名遣い」研究を反映したものであり、その字音の判定には『韻鏡』や韻書の反切が利用されているのである。

この古文獻における字音や近世・近代における「字音仮名遣い」研究の実態に関しては、諸先学によってある程度明らかにされてい

る。しかし個別の韻目に属する字音の通時的な変遷過程については、これまで顧みられることはなかった。本研究は「字音仮名遣い」成立に至るまでの漢音・呉音の変遷を解明する手始めとして、齊（齊霽）韻に対する字音注の変遷過程を明らかにするものがある。

## 一 現代漢和辞典における齊韻漢音形・呉音形

一—— 齊（齊霽）韻所属字について

齊（齊霽）韻字の例として「第」「弟」などがあるが、これらは現代の漢和辞典では「漢音テイ」「呉音ダイ」とされている。齊（齊霽）韻は『韻鏡』では第十三転（開口）・第十四転（合口）の四等に所属する。第十三転・第十四転の四等字は次の通りである<sup>1)</sup>。

第十三転（開口）

範 批 聲 迷 敷 頓 陸 米 閑 媿 薛 謎（唇音）

氏 梯 題 泥 郎 體 弟 襴 帝 替 第 泥 (古音)

雞 谿 倪 啓 倪 計 契 詣 (牙音)

齋 妻 齊 西 濟 泚 齋 洗 霽 砌 嶠 細 (齒音)

鷺 醴 兮 吟 侯 翳 (歎) 葵 (喉音)

黎 鸞 禮 麗 (舌齒音)

第十四転 (合口)

圭 睽 桂 (牙音)

娃 睦 攜 曄 慧 (喉音)

一―二 漢和辞典における状況

これら斉 (齋霽) 韻に属する字には、現代の漢和辞典では規則的に漢音・呉音が与えられている。以下にその状況を示そう。

一―二―一 『学研新漢和辞典』

まず一冊の漢和辞典では大部のものである、『学研新漢和辞典』(藤堂明保・加納喜光編、二〇〇五年)における状況を示す。(紙幅の都合により代表的なもののみを示す。字音は「漢音・呉音」の順。「慣」は慣用音を示す。以下同じ。)

第十三転 (開口) 所属字

窳 (ヘイ・ハイ (慣ヒ)) 鞞 (ヘイ・パイ) 迷 (ベイ・マイ (慣マイ))

媿 (ヘイ・ヘ) 氏 (テイ・タイ) 題 (テイ・ダイ) 泥 (ダイ・ナイ)

弟 (テイ・ダイ (慣テ)) 襴 (ネ・ナイ・テイ (慣ネイ))

雞 (ケイ・ケ) 倪 (ケイ・ゲ) 詣 (ケイ・ゲ (慣ケイ))

齋 (セイ・サイ) 齊 (セイ・ザイ) 濟 (セイ・サイ (慣ザイ))

洗 (セイ・サイ (慣セン)) 鷺 (エイ・アイ) 醴 (ケイ・ク)

兮 (ケイ・ゲ) 黎 (レイ・ライ) 鸞 (テイ・ナイ)

第十四転 (合口) 所属字

圭 (ケイ・ク) 桂 (ケイ・カイ) 娃 (エイ・エ) 睦 (ケイ・ケ)

攜 (ケイ・エ)

以上を見ると、一部の例外を除いて規則的に字音が定められていることがわかる。すなわち「漢音―e i」「呉音―a i」を基本とし、カ行音 (牙音・喉音) 字のみ開口・合口とも「漢音―e i」「呉音―e」となっているのである。

一―二―二 『大漢和辞典』

次に日本で編纂された漢和辞典としては最大のものとして認められる、『大漢和辞典』(諸橋轍次著、大修館、一九四三―一九六〇)における状況を示す。

第十三転 (開口) 所属字

窳 (ヘイ・ハイ) 鞞 (ヘイ・パイ) 迷 (ベイ・マイ (慣マイ))

媿 (テイ・タイ) 題 (テイ・ダイ) 泥 (テイ・ナイ)

襴 (ダイ・ナイ (慣ホ)) 雞 (ケイ) 谿 (ケイ・ゲイ) 倪 (ケイ)

詣 (ケイ (慣ケイ)) 齋 (セイ・サイ) 齊 (セイ・ザイ)

濟 (セイ・サイ) 鷺 (エイ) 醴 (ケイ) 兮 (ケイ・ゲイ)

黎 (レイ・ライ) 鸞 (テイ・セイ)・ナイ

第十四転(合口)所属字

圭 ケイ・ケ 桂 エイ(ケイ・エ) 睦 ケイ・ケ

攜 ケイ・ケ 慧 ケイ・エ

以上を見ると、『学研新漢和辞典』とは少々規則が異なることがわかる。すなわち「漢音—e i」「呉音—a i」が基本であることは同じであるが、カ行音・ア行音(牙音・喉音)は開口の方が漢音・呉音とも「—e i」となっており、合口の方は「漢音—e i」「呉音—e」となっている。

一—三 現代漢和辞典の規則性

以上見てきたように、現代の漢和辞典では齊(齊霽)韻所属字の漢音・呉音は(多少の例外はありながらも)規則的に定められていることがわかる。そしてその規則からはみ出す音でありながら、日常的に使われているために外すことのできない音を「慣用音」としているのである。ただしその規則には多少の異同はある。

二 近世・近代における齊韻漢音形・呉音形

次に現代の漢和辞典に影響を与えていると考えられる、近世・近代の『韻鏡』注釈書について見ることにしよう。

二—一 大矢透『隋唐音図』

まず近代『韻鏡』研究の草分けと言える、大矢透(一八五〇—一九二八)の『隋唐音図』(昭和七年刊、一九三二)から見てみよう。<sup>2)</sup>

外転第十五開(齊霽)

篋 ヘイ・ヘイ 鞞 ヘイ・ペイ 迷 ベイ・メイ 氏 テイ・タイ

題 テイ・ゲイ 泥 デイ・ネイ 雞 ケイ・ケイ 倪 ケイ・ゲイ

齋 セイ・サイ 齊 セイ・サイ 鷺 エイ・エイ 醴 ケイ・ケイ

兮 ケイ・ゲイ 黎 レイ・ライ

外転第十六合(齊霽)

圭 ケイ・ケ 睽 ケイ・ケ

以上を見ると、開口では舌音(ナ行音除く)・歯音・来母が「漢音—e i」「呉音—a i」となっているのに対して、唇音・牙音・喉音とナ行音では漢音・呉音とも「—e i」となっているのがわかる。また合口では「漢音—w e i」「呉音—w e」となっている。

牙音・喉音だけでなく唇音も「—e i」のみとなっているのが、後の『大漢和辞典』などとは異なる点である。

二—二 太田全斎『漢呉音図』

続いて近世後期の『韻鏡』研究書である、太田全斎(一七五九—一八二九)の『漢呉音図』(文化一二年成、一八一五)を見てみることにしよう。<sup>3)</sup>『漢呉音図』では漢音・呉音をさらに「原音/次音」に分けて示している。(「原音」を反切と見なして導き出されるのが「次音」である。)

外転第十三開(齊霽)

篋 ヘイ/ヒ、ハイ/ヒ 鞞 ヘイ/ヒ、バイ/ヒ

迷 ベイ／ピ・マイ／ミ 氏 テイ／チ・タイ／チ

題 テイ／チ・タイ／チ 泥 デイ／ヂ・ナイ／ニ

谿 ケイ／キ・ガイ／キ 倪 ケイ／ギ・ガイ／キ

啓 ケイ／キ・カイ／キ 掬 ケイ／ギ・ガイ／ギ

齋 セイ／シ・サイ／シ 齊 セイ／シ・サイ／シ

齊 セイ／シ・サイ／シ 鷲 エイ／イ・ヤイ／イ

兮 ケイ／キ・ガイ／キ 侯 ケイ／キ・ガイ／キ

歎 ケイ／キ・カイ／キ 黎 レイ／リ・ライ／リ

鸞 デイ／ヂ・ナイ／ニ

外転第十四合 (齊齋霽)

圭 クエイ／ケイ・クエ／ケ 桂 ユエイ／エイ・ユエ／エ

睦 クエイ／ケイ・ウエ／エ

以上を見ると、開口では漢音「|e i (原音) / |i (次音)」

呉音「|a i (原音) / |i (次音)」、合口では漢音「|we i

(原音) / |ei (次音)」、呉音「|we (原音) / |e (次音)」

となっているのがわかる。「原音/次音」があるために少々複雑に

なっているものの、基本的には整然としたパターンとなっている。

## 二一三 文雄

次に近世『韻鏡』研究の草分けである文雄(一七〇〇〜一七六

三)の『磨光韻鏡』(延享元年刊、一七四四)を見てみよう。<sup>4)</sup>

## 外転第十三開 (齊齋霽)

窳 ヘイ・ヘイ 馨 ヘイ・ペイ 迷 ベイ・メイ 氏 テイ・タイ

題 テイ・タイ 泥 デイ・ナイ 雞 ケイ・ケイ 倪 ケイ・ケイ

齋 セイ・サイ 齊 セイ・サイ 鷲 エイ・エイ 醜 ケイ・ケイ

葵 ケイ・ケイ 黎 レイ・ライ

## 外転第十四合 (齊齋霽)

圭 ヘイ・ペ 圭 ケイ・ケ 颯 ゲイ・ゲ 桂 エイ・エ

睦 ケイ・ケ 攜 ケイ・エ

以上を見ると、開口では舌音・歯音・来母が「漢音|e i」

呉音とも「|e i」となっているのに対して、唇音・牙音・喉音では漢音・

呉音とも「|e i」となっているのがわかる。これは二一で挙げ

た大矢透とまったく同じパターンである。ただし文雄はナ行音も他

の舌音に合わせている。合口では「漢音|e i」「呉音|e」とな

っている。大矢と違って合拗音は反映されていない。

## 二一四 文雄以前

ここまで『韻鏡』研究書において齊(齊齋)韻の漢音形・呉音形

がどのように現れているか見てきた。『韻鏡』では図面をもとに体

系的に字音を定めることができるが、それでは『韻鏡』が普及する

前の時代には齊(齊齋)韻漢音形・呉音形はどう現れていたのか。

まず近世初期の法華経音義書である、日遠(一五七二〜一六四

二)の『法華経随音句』(元和六年成、一六二〇、寛永二〇年刊、一

六四三)を見てみることにしよう。<sup>5)</sup> この書は韻書、特に『古今韻会

『挙要』(元・熊忠著、一二九七年成)を利用して字音を定めているのが特徴である。この書において齊(齋齋)韻の漢音形・呉音形について議論しているのは、次の五字についてである。

・剃除鬚髮文、剃、韻會音曰、他計切、次清音音。呉タイ、漢、テイ也。(上6ウ7〜8)

諸母涕泣文、音義、科注、補注、箋難、並云、涕、他礼切一。句解、云「它計切」。呉タイ、漢、テイ也。訓讀時、テイ、可レ讀。

(上34ウ4〜5)

各齋音寶花滿掬文、齋、音義云、子突切文。科注、箋難、云「祖兮切」。既齊韻也。サイ、ハ、呉、セイ、漢也。韻會、作「賤西切」云。是亦同。(上39オ9〜ウ1)

唯髻中明珠文、髻、韻會音曰、吉詣切。角清音音。計、爲字母、繫字、等類也。尔、ケ音、有歟。計、繫、髻、皆ケ音。讀來、以二韻中大底、并切、見、呉、カイ、漢、ケイ、様、今更難レ改。可レ從「讀來」。(下3ウ3〜6)

以國付・弟音王與夫人二子音、弟、呉、タイ、漢、テイ也。(下26オ10)

以上を見ると、日遠は齊(齋齋)韻の五字についてすべて「漢音―ei」「呉音―ai」と認定していることがわかる。後世の文雄は力行音(牙音・喉音)については漢音・呉音とも「―ei」としていたが、日遠はこれも「漢音―ei」「呉音―ai」としている。

サンプルがわずか五字なので確実なことは言えないが、日遠は齊(齋齋)韻全体について「漢音―ei」「呉音―ai」と認定しているようである。

日遠と同じ日蓮宗の僧日相(一六三五〜一七一八)が著した音点本『妙法蓮華経』(元禄七〜八年刊、一六九四〜一六九五)では、のべ47字(異なり29字)について「呉」「漢」注記が付されている。これについて、日相は冒頭で次のように述べている。

假名ハノ右方ノ爲「正意」少々ノ左方ノ付假名ハノ暫ニ爲レ令レ辨「呉漢差異」也非レ爲二讀誦一矣

日相は右側に正式な読誦音を付した上で、左側に「呉漢の差異」を示すというのである。このようにして付された「呉」「漢」注記のべ47字(異なり29字)のうち、齊(齋齋)韻に属するものはのべ21字(異なり12字)になる。つまり4割以上が齊(齋齋)韻で占められているのである。ここでは異なり12字を示す。

詣ケイ カイ呉(五八七) 低テイ タイ呉(九四一)

繫ケイ カイ呉(一一九) 陞ベイ ハイ呉(一一三)

颺カイ ケイ漢音(一一三五) 計ケイ カイ呉(一一三)

谿ケイ カイ呉(二六一) 稽ケイ カイ呉(二八六)

泥アイ 呉タイ(二四四) 雞ケイ カイ呉(二八三)

髻ケイ カイ呉(二九五) 閉ハイ ハイ呉(三〇〇)

日相は読誦音「―ei」または「―e」に対して、「呉音―ai」

の注記を付している。(ただし「懸」のみ読誦音「|ai」に対して「漢音|ei」の注記。)これは法華經読誦音に対する「漢音混入」意識の表れであろうか。

次に日遠『法華經隨音句』と同じ近世初期に刊行されている珠光『浄土三部經音義』(天正二八年序、一五九〇)を見てみよう。<sup>8)</sup>この書もやはり「古今韻會舉要」などの韻書を利用している。

この書では各掲出字にそれぞれ漢音・呉音が掲載されている。ここでは便宜上代表的なもののみを五十音順に示す。

計ケイ・ケ (二六二) 詣ケイ (二六七) 漢ケイ (三二五)  
繫ケイ・ケ (四七四) 慧ケイ・エ (六九一)  
洗セイ・サイ (三〇五) 低テイ (一一四)  
泥テイ・ナイ (二九五) 提テイ・ダイ (五六六)  
抵テイ・タイ (五七七) 米ベイ・マイ (四〇五)  
閉ヘイ (八四七) 迷ベイ・メイ (一〇〇二)  
禮レイ・ライ (四八四) 麗レイ (六九七)

カ行音が「漢音|ei」「呉音|e」となっているのに対して、サ行音・タ行音(ナ行音)・ラ行音は「漢音|ei」「呉音|ai」となっている。マ行音(ハ行音)の呉音形については「|ei」「|ai」が混在している。この書では漢音形・呉音形ともある程度整理されているが、完全に整理されてはいないようである。

### 三 中世以前における音韻漢音形・呉音形

それでは、中世以前には齊(齊齋)韻はどのような字音となっていたであろうか。ここでは訓点資料、古辞書、仏教音義などの漢音系・呉音系資料を見てみることにする。

#### 三― 漢音系資料

まず長承本『蒙求』の訓点から見てみることにしよう。<sup>9)</sup>ここでは便宜上代表的なもののみを五十音順に示す。

(本書には①平安時代中期の朱点、②長承三年(一一三四)の墨点、③別の墨点がある。ここでは②についてはその注記を省略した。)

詣ケイ<sup>①</sup>ケイ (19) 鷄ケイ<sup>③</sup> (27) 稽ケイ (27)  
桂 化<sup>④</sup>ケイ (62) 惠クエイ (82) 齊サイ (34)  
妻セイ (57) 齊セイサイ<sup>③</sup> (57) 悌テイ<sup>①</sup>テイ (15)  
梯テイ (41) 閉ヘイ (3) 米ヘイ<sup>①</sup>ヘイ (15)  
札レイ (16) 蠡 札反<sup>①</sup>レイ (69)

カ行音で「|ei」または「|wei」、タ行音・ハ行音・ラ行音でもいずれも「|ei」となっているのに対して、サ行音のみ「|ei」「|ai」両形が混在している。

次に『大慈恩寺三藏法師伝』古点を見てみよう。<sup>10)</sup>やはり便宜上代表的なもののみを五十音順に示す。

(本書にはA延久承暦頃の朱点。B同上頃の墨点、C承德三年

(二〇九九)の墨点、D同上頃の朱点、E永久四年(一一二六)の墨点、F嘉応二年(一一七〇)の墨点がある。)

慧<sup>ケ</sup> <sup>エ</sup> <sup>イ</sup> (二五八) 珪<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ア</sup> 璋 (二六三) 醴<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> <sup>エ</sup> 羅山 (二二一五)

猊<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ク</sup> 吼 (七九〇) 惠<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 濟 (二〇一九)

蕙<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 正 (二〇二六九) 濟<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>イ</sup> 馬 (二〇二四)

鏘<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 濟<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>イ</sup> 濟 (二三三) 凄<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>イ</sup> 寒 (二三六)

栖<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 城 (八六) 凄<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 氣 (八三三) 慘<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 悽<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (二〇二八〇)

帝<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 城 (一八四) 遞<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 送 (一三三七) 堤<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 封 (七八〇)

梯<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 航<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 者 (七九五) 萌<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 蒂<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (八一七) 疑<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 滯<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (八一七)

嬬<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 摩<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 城 (五五三) 皇<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 陛<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (九二九) 迷<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 迷<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 生 (八一九)

黎<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> 庶 (七四七) 禮<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (九四二) 惠<sup>イ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> (二〇一九)

カ行音では「|ei」「|wei」「|wei」、ハ行音・マ行音・ラ行音では「|ei」となっている。それに対してサ行音・タ行音では「|ei」「|ai」両形が混在している。

近世以降の『韻鏡』注釈書では特にサ行音・タ行音・ラ行音で「漢音|ei」「呉音|ai」と整理されていることが多かった。しかしこのように漢音系資料ではサ行音・タ行音で「|ei」「|ai」両形が混在しており、近世以降の「漢音|ei」「呉音|ai」という整理は必ずしも当てはまらないことがわかる。

### 三十一 呉音系資料

まず『観智院本類聚名義抄』(鎌倉時代写)の「和音」から見てみることにしよう。<sup>11)</sup> ここでも便宜上代表的なもののみを五十音順に示す。(引用に当たっては声点は一切省略している。以下同じ。)

髻<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛下本三三七三) 稽<sup>ケ</sup> (僧下六五二)

妻<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛中七二) 洗<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (法上三三四)

齊<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> 或<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (法下三八八) 低<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛上一二二四)

逆<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> 帝<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛上五三三) 體<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛上八六二)

提<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛下本七八六) 弟<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> (佛下末二八)

渥<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup> (法中五二八) 陛<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (法中四〇七)

迷<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛上四五六) 米<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (法下二九六)

犁<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (佛下末一六) 札<sup>ケ</sup> <sup>イ</sup> (法下八八)

惠<sup>ケ</sup> (法中六九二)

カ行音・ハ行音では「|ei」となっているのに対して、サ行音・タ行音・マ行音・ラ行音では「|ei」「|ai」両形が混在している。漢音系資料と同様に、こちらも近世以降の「漢音|ei」「呉音|ai」という整理は当てはまらないことがわかる。

次に心空(一一三一九〜一四〇二)の『法華経音義』(上巻は三内音義、永和四年写、一三七八)における齊(齊齊)韻の音形を見てみよう。(ここでは出現順に並べる。)

ケ :: 繫計 :: 髻 :: 稽 :: (上四ウ五)

ケイ 醜詣 谿啓桂雞 (上五オ4ゝ5)

サイ : 妻濟齋齋 : 齶切 : 齊細 : 西 : (上六ウ2ゝ4)

タイ 諦體 : 帝刺 : 啼第 : 涕匪 : 提 : (上一〇オ5ゝ6)

テイ 低剃泥涅滯涕弟滴帝提 (上一一ウ3)

ライ 札 : 戾 : (上一二オ5)

レイ 隸 (上一三オ3)

ネイ 祢 (上一四オ2)

ヒ : 鞞 : (上一四ウ4)

ヘイ : 陞閉 : (上一五ウ2)

マイ : 米 : (上一六オ3)

メイ 迷 (上一六ウ4)

エ 慧惠 : (上一七オ5)

こちらはカ行音で「|e i」「|e」となっているのに対して、タ行音・ラ行音・マ行音で「|e i」「|a i」両形が混在している。(サ行音は「|a i」のみである。またハ行音は「|e i」「|i」の二形である。)やはり近世以降の「漢音|e i」「呉音|a i」という整理からは外れていることがわかる。

同じ心空の『法華経音訓』(卷音義、至徳三年刊、一三八六)も見てみることにしよう。<sup>13)</sup>ここでもやはり代表的なもののみを五十音順に示す。

詣ケイ (一一ウ1) 繫ケ (二五オ5) 妻サイ (二一オ6)

第タイ (一ウ2) 弟テタイ (一五オ5)

泥タイ (一九ウ6) 帝クタイ (二二オ5)

祢襴ネイ (四四ウ4) 鞞ヒ (二九オ1) 陞ヘイ (二五オ6)

迷メイ (一九オ4) 米マイ (三三ウ1)

禮札ライ (六ウ3) 隸レイ (四四ウ4) 慧惠エ (四ウ6)

やはりカ行音で「|e i」「|e」となっているのに対して、タ行音・マ行音・ラ行音で「|e i」「|a i」両形が混在している。

(またやはりサ行音は「|a i」のみで、ハ行音は「|e i」「|i」の二形である。)『法華経音義』と同様近世以降の「漢音|e i」「呉音|a i」という整理からは外れていることがわかる。

時代はさかのぼるが、院政期頃施点の『慈光寺藏大般若経』字音点についても見ておこう。<sup>14)</sup>

翳エイ (不1) 契カイ (3・562) 峴ケイ (596)

齋サイ (不10) 臍サイ (不7) 齊サイ (不1)

細サイ (不1) 剃タイ (54) 底テイ (不1)

麗レイ (540・不1・不9)

用例数が少ないので確実なことは言えないが、カ行音・タ行音で「|e i」「|a i」両形が混在していることは確かである。

同じ仏典音読資料で、院政期から鎌倉中期頃施点の『安田八幡宮藏大般若波羅蜜多経』の音注についても見ておこう。<sup>15)</sup>ここでも代表的なもののみを五十音順に示す。

詣<sup>ケイ</sup>(四六) 繫<sup>ケ</sup>(二〇四)

妻<sup>サイ</sup>(五七) 帝<sup>テイ</sup>(三三七) 底<sup>テイ</sup>(八八)

剃<sup>タイ</sup>(一四四) 帝<sup>テイ</sup>(一八八) 弟<sup>タイ</sup>(三〇一六)

啼<sup>タイ</sup>(四三三) 啼<sup>テイ</sup>(四三三) 啼<sup>タイ</sup>(四六五)

剃<sup>タイ</sup>(七一四) 閉<sup>ヘイ</sup>(六六) 戾<sup>ライ</sup>(一九九)

隸<sup>レイ</sup>(三三三) 戾<sup>ライ</sup>(五〇三)

隸<sup>レイ</sup>(五二八) 戾<sup>レイ</sup>(六五五)

こちらもやはりカ行音で「ei」「e」となっているのに対して、タ行音・ラ行音で「ei」「ai」両形が混在している。中には同一の字に対して「ei」と「ai」の両形が注音されているものもある。(ここでは傍線で示してある)。「戾」には「ui」という音形もある。(やはりサ行音は「ai」のみ、ハ行音は「ei」のみである。) いずれにしても「漢音<sup>16</sup>—ei」「呉音<sup>17</sup>—ai」という整理通りにはいかなることがわかる。

### 三—三 齊韻漢音形・呉音形の源流

以上見てきたように、実際の呉音系資料には「ei」「ai」両形が混在し、また漢音系資料にも「ei」「ai」両形が混在していることがわかる。すなわち齊(齊齋)韻については「漢音—ei」「呉音—ai」という単純な整理は成立せず、漢音または呉音の中で「ei」「ai」両形が共存しているのが現実なのである。これについては、特に呉音における両形の存在について諸

先学によっていくつかの説が出されている。

まず考えられているのは仏典資料への漢音系字音の混入、また漢籍資料への呉音系字音の混入である。これらの混入を取り除くことで、純粹な漢音・呉音の体系の解明をしようとする試みもある。<sup>16</sup>

次に考えられているのは上代特殊仮名遣いとの関係である。すなわちエ列甲乙を区別するのは「ケ・ヘ・メ」(カ行音・ハ行音・マ行音すなわち唇音・牙音・喉音)に限られており、それ以外のサ行音・タ行音・ナ行音(舌音・齒音)にはエ列甲乙の区別がなかった。「エ甲類」とはつきりしている唇音・牙音・喉音についてはそのまま「ei」という字音で固まったが、その中間の調音点である舌音・齒音については時に甲類的、時に乙類的となったために、結果的に「ei」「ai」というユレが生じたという説である。<sup>17</sup>

さらに母胎となった中国語の発音そのものの複層性に原因を求め考える方もある。<sup>18</sup>

### 四 齊韻に見る漢音形・呉音形変遷の一端

以上見てきた齊(齊齋)韻の漢音形・呉音形の変遷について、以下に考察を加えることにしよう。

#### 四—一 調音点毎に見た齊韻漢音形・呉音形の変遷

齊(齊齋)韻の漢音形・呉音形を時代順に並べると、次の表1・表2のようになる。

表1 脣音・牙音・喉音

学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図 (合口)	漢吳音図 (開口)	磨光韻鏡 (合口)	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	脣音	ハ行・マ行	牙音・喉音	カ行・ワ行	ei
																			ei
																			ei
																			ei
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図 (開口)	漢吳音図 (開口)	磨光韻鏡 (開口)	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	脣音	ハ行・マ行	牙音・喉音	カ行・ワ行	ai
																			ai
																			ai
																			ai
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図 (合口)	漢吳音図 (合口)	磨光韻鏡 (合口)	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	脣音	ハ行・マ行	牙音・喉音	カ行・ワ行	ei
																			ei
																			ei
																			ei
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図 (開口)	漢吳音図 (開口)	磨光韻鏡 (開口)	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	脣音	ハ行・マ行	牙音・喉音	カ行・ワ行	ai
																			ai
																			ai
																			ai

表2 舌音・齒音・来母

学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図	漢吳音図	磨光韻鏡	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	舌音	タ行・ナ行	齒音	サ行	来母	ei
																				ei
																				ei
																				ei
																				ei
																				ei
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図	漢吳音図	磨光韻鏡	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	舌音	タ行・ナ行	齒音	サ行	来母	ai
																				ai
																				ai
																				ai
																				ai
																				ai
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図	漢吳音図	磨光韻鏡	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	舌音	タ行・ナ行	齒音	サ行	来母	ei
																				ei
																				ei
																				ei
																				ei
																				ei
学研新漢和 大字典	大漢和辞典	隋唐音図	漢吳音図	磨光韻鏡	日相音点本	法華經隨音句	浄土三部經音義	法華經音調	法華經音義	類聚名義抄	安田大般若	慈光寺大般若	蒙求	三藏法師伝	舌音	タ行・ナ行	齒音	サ行	来母	ai
																				ai
																				ai
																				ai
																				ai
																				ai

以下、調音点毎に解説を加えることにする。

まず唇音（↓表1）であるが、中世以前の漢音系資料では「|ei/|ei」で統一されていたのに対して、呉音系資料で「|ei/|ei/|ai」のそれぞれの形が見られた。近世に至って「漢音|ei」「呉音|ai」とされたが、『磨光韻鏡』では漢音・呉音とも「|ei」とされた。しかし近代に至って「漢音|ei」「呉音|ai」という形に修正された。

次に牙音・喉音（↓表1）についてであるが、これらは中世以前には呉音系資料・漢音系資料ともに「|ei/|e」という形で現れている。（呉音系資料では「|ai」もある。）近世に至って「漢音|ei」「呉音|ai」とされたが、『磨光韻鏡』では漢音・呉音ともに「|ei」とされた。『大漢和辞典』でもこれを承けて呉音は「|ei/|e」とされているが、『学研新漢和大字典』では「|ai/|e」に修正されている。

舌音・齒音（↓表2）については、中世以前には呉音系資料・漢音系資料ともに「|ei/|ai」両形が見られたが、これについては『浄土三部経音義』以降「漢音|ei」「呉音|ai」とされ、『磨光韻鏡』でも同様となっている。この図式はそのまま現代の漢和辞典にも受け継がれている。

来母（↓表2）についても呉音系資料では「|ei/|ai」両形が見られたが、やはり『浄土三部経音義』以降「漢音|ei」「呉

音|ai」とされ、『磨光韻鏡』や現代の漢和辞典でも同様となっている。

#### 四―二 漢音・呉音の整理と韻書・『韻鏡』

このように『浄土三部経音義』以降、人為的な漢音・呉音の整理が始まるわけであるが、そこで使われたのが韻書の反切である。二―四で述べたように、『浄土三部経音義』も『法華経随音句』も『古今韻会举要』などの韻書を利用しているのが特徴であるが、その反切を利用した字音整理の結果がここに現れていると言えよう。ただし韻書の反切による字音整理は個別的・断片的なものに留まる。

『磨光韻鏡』は周知のように『韻鏡』の図面をもとに漢音・呉音・唐音を記したものであるが、ここではさらに体系的な整理が入る。韻書だけではわかりにくい他の字との関係も、『韻鏡』では一目瞭然となるからである。

しかしながら『磨光韻鏡』で特筆しておかなければならないのは、唇音・牙音・喉音では漢音・呉音ともに「|ei」としている点である。これは文雄がある程度、伝統的な字音を考慮に入れている結果と考えられよう。（例えば『安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經』では、カ行音・ハ行音には「|ai」形は見られなかった。）この図式は大矢透『隋唐音図』にも受け継がれている。逆に『漢呉音図』ではすべての調音点において漢音「|ei（原音）/|ei（次音）」、呉音「|ai（原音）/|ei（次音）」と統一されている。

これは太田全齋が、伝統的な字音よりも『韻鏡』の図全体をもとにした体系的な整理を重視した結果と考えられるが、字音整理の通時的な流れから見ればむしろ異彩を放っていると言える。

現代の漢和辞典で唇音・牙音・喉音も「漢音 | e i」「呉音 | a i」とされているのは、恐らく他の舌音・齒音と合わせた結果と考えられるが、特に呉音については古文獻の字音は考慮に入れられていないと言わざるを得ない。<sup>19)</sup>

#### 四一三 まとめ

齊（齊齋）韻漢音形・呉音形の変遷についてまとめると、次のようになる。

① 中世以前には、齊（齊齋）韻については漢音系資料・呉音系資料ともに「| e i / | e / | a i」が混在する状態であり、音形における漢音と呉音の区別は見られなかった。

② 中世から近世に入る頃に韻書の反切による字音整理が行われるようになり、「漢音 | e i」「呉音 | a i」という図式が登場した。

③ 文雄『磨光韻鏡』に至って漢音・呉音の体系的な整理が行われたが、唇音・牙音・喉音については漢音・呉音ともに「| e i」として伝統音の形を保っていた。これは大矢透にも受け継がれた。

④ 現代漢和辞典に至って唇音・牙音・喉音も「呉音 | a i」となり、「漢音 | e i」「呉音 | a i」という図式が完全に固定された。

## 五 結語 — 自然発生的な区別から人為的な区別へ

漢音はもともと中国の正式な発音（正音）として輸入されたもので、それ以前に日本に定着していた字音（和音）と区別されるようになった。しかしその区別は「正音（漢音）≡漢籍の読書音」「和音（呉音）≡仏典の読誦音」といった場の問題であり、いわば自然発生的な区別であった。最初から漢音・呉音の音形としての区別が存在していたわけではない。

中世になって韻書が入ってくると、漢字音を容易に把握できるようになる。そして近世初期には、韻書の反切を利用した人為的な漢音・呉音の区別が行われるようになったが、あくまでそれは個別のものに留まっていた。しかし近世中期以降『韻鏡』研究が盛んになるにつれて、図面を利用した体系的人為的な漢音・呉音の整理が行われるに至った。

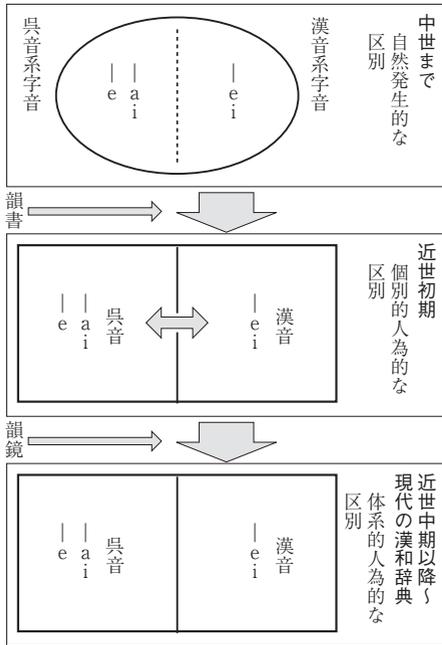
この体系的人為的な区別の利点は、『韻鏡』と韻書の反切を利用することにより、すべての字に漢音と呉音を与えることができる点である。そのためにこの方法は近世を通じて行われ、現代の漢和辞典にも基本的に受け継がれているのである。<sup>20)</sup> これら体系的人為的な区別による漢音・呉音が、古文獻の字音と異なってしまうのは当然の帰結と言える。（↓図）

近年古文獻の蒐集・整理の進展により、諸先学によってその字音

の実態が明らかにされつつある。それとともに近世以降の「字音仮名遣い」の問題点も多数指摘されている。しかしながら通時的な視点を通して「字音仮名遣い」の決定に至るまでの過程を考察した研究は、これまであまりなかったようである。

本研究ではそれら諸先学の成果を利用しながら、齊(齋)韻の漢音形・呉音形を切り口として、その通時的な変遷過程を明らかにした。今後は対象を他の韻目にも拡大しながら、考察を続けることにしたい。その中で、漢音・呉音の自然発生的な区別から体系的な人為的な区別への変遷の実態も、明らかにできるであろう。

図



注

- (1) 寛永五(一六二八)年版(勉誠社文庫17)による。
- (2) 勉誠社文庫42による。
- (3) 勉誠社文庫57による。
- (4) 勉誠社文庫90による。
- (5) 『法華音義類聚 乾』(本満寺)による。
- (6) 中澤(一九九九)、中澤(二〇〇〇)。『法華経随音句』における「呉音」「漢音」および文雄との比較については、中澤(二〇〇八)参照。
- (7) 本満寺刊行の複製本による。
- (8) 勉誠社文庫30による。
- (9) 築島裕編の影印(汲古書院)による。字音の検索に当たっては沼本(一九九五b)を参照した。
- (10) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究』(東京大学出版会)による。
- (11) 正宗敦夫編の複製本(風間書房)による。字音の検索に当たっては沼本克明(一九九五b)を参照した。
- (12) 『古辞書音義集成5 法華経音義三種』(汲古書院)による。字音の検索に当たっては小倉肇(一九九五)資料篇二「法華経音義字音対照表」を参照した。
- (13) 日本古典全集『倭点法華経 下』による。字音の検索に当たっては小倉(一九九五)を参照した。
- (14) 松尾捨(一九四九)による。
- (15) 東辻保和(一九七二)および東辻保和・岡野幸夫(二〇〇七)による。
- (16) 藤堂明保(一九五九)参照。
- (17) 高松政雄(一九八二)四八八〜五〇六頁、および沼本(一九九七)一九六〜二四頁参照。

(18) 河野六郎(一九七六) 参照。

(19) 近世以降の「字音仮名遣い」の問題点については沼本(一九九五a) 参照。

(20) ただし最近では『現代漢語例解辞典』(小学館) や『五十音引き漢和辞典』(三省堂) など、古文獻をもとに字音を定めている漢和辞典もある。

(21) 小倉(一九九五)、沼本(一九九五b) 等。

#### 引用文献

小倉 肇(一九九五) 『日本呉音の研究』(新典社)

河野六郎(一九七六) 「日本呉音」に就いて、『言語学論叢』最終号、『河野

六郎著作集2』所収、平凡社、一九七九

高松政雄(一九八二) 『日本漢字音の研究』(風間書房)

藤堂明保(一九五九) 呉音と漢音、『日本中国学会報』11、『中国語学論集』

所収、汲古書院、一九八七

中澤信幸(一九九九) 一七世紀初頭における『古今韻会举要』の受容 — 日遠

『法華経随音句』を中心に — 『愛文』34

中澤信幸(二〇〇〇) なぜ日遠は伝統的読誦音を改変したか(『訓点語と訓

点資料』<sup>104</sup>)

中澤信幸(二〇〇八) 日遠『法華経随音句』における「呉音」「漢音」(『訓

点語と訓点資料』<sup>120</sup>)

沼本克明(一九九五a) 字音仮名遣いについて(築島裕編『日本漢字音史論輯』

所収、汲古書院)

沼本克明(一九九五b) 呉音・漢音分韻表(築島裕編『日本漢字音史論輯』

所収、汲古書院)

沼本克明(一九九七) 『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院)

東辻保和(一九七二) 安田八幡宮蔵 大般若波羅蜜多經の音注(資料)(『訓

点語と訓点資料』44)

東辻保和・岡野幸夫(二〇〇七) 安田八幡宮蔵 大般若波羅蜜多經の音注

(索引)(『訓点語と訓点資料』<sup>119</sup>)

松尾 拾(一九四九) 慈光寺蔵大般若經の字音点について(『国語学』3)

— なかざわ・のぶゆき、山形大学人文学部准教授 —